

2026_0424「最後のオーロラ」日々の理科 4275号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

私が二十年以上にわたって遠隔観測を続けている、スウェーデン北部のオーロラ観測地。ここでは毎年、八月下旬から翌年四月中旬頃までがオーロラのシーズンとされています。極夜の深い闇から、やがて白夜へと向かう光の移ろいの中で、空はさまざまな表情を見せてきました。近年は太陽活動が活発な周期にあたり、例年なら終わりを迎える四月下旬になっても、なおオーロラが出現することがあります。

この日もまた、空の高みに淡くにじむような光が現れていました。はっきりとしたカーテン状ではなく、地平線近くから静かに立ち上がるような、かすかな輝きです。すでに夜の闇は浅く、空はどこか青みを帯び、オーロラの光はその中に溶け込むように広がっていました。雪の残る大地と、針葉樹の黒いシルエット、その上にかすかに揺れる光。長いシーズンの終わりを告げるこの光景は、華やかさとは対照的に、胸にしみる静けさをたたえています。

やがて訪れる白夜の季節を前に、この地の空が見せる最後の贈り物のようでもあり、同時に別れを告げる合図のようにも感じられました。悲しいほどに美しい、まさに「最後のオーロラ」です。

(2026年4月下旬／スウェーデン・ヨックモック郡・ポルユス駅／東京から遠隔観測)

